

新撰國文講本

卷之五



K220.8

22

5

文學士 和田萬吉 永井一孝 合編 卷之五

新撰國文講本

東京 合資 會社 富山房發行

新撰國文講本卷之五

目次

菅公筑紫の詠詩	一
人を善く視る	四
巴理府	九
月無き夜	十四
鶴越	十六
禁酒	二十二
辛崎の松	二十七
長柄山の春景	三十

目次



湖上の花	三十
信用の必用	三十一
賢明なる判官	三十五
亞弗利加の孤立	三十九
水晶宮	四十七
四季の歌	五十四
牧笛	五十七
牧童	六十
倫敦の統計	六十
富士川の水禽	七十一

朝政	七十六
文覺と西行との會見	七十九
分業	八十二
志の有無深淺	九十
師友の撰擇	九十三
平源二氏の興亡	九十八
怯懦	百二
月は世々のかたみ	百四

目次終

新撰國文講本卷之五

文學士 和田萬吉 合編

永井一孝

菅公筑紫の詠詩

天満宮の御廟地は安樂寺といひ、天原山と號す。則ち菅丞相を葬りし處なり。菅公の御社を安樂寺の在りし處に建てられければ、後までも天満宮を安樂寺といへり。

菅公は穗日命の後裔、菅原是善卿の子にして、諱は道

眞字は三とぞ云はれける。清和天皇の御時より對策及第して、陽成光孝宇多醍醐の五帝に仕へて、官は右大臣に昇り、百官をすべ、萬機を司り、此の公の才徳に比ぶべき學問を具したるはおはさまりしかど、時平大臣の讒言に依りて、延喜元年正月二十五日、右大臣の官職を止められ、太宰權帥に左遷せらるゝよし、宣旨をぞ下されける。かくて、二月朔日、終に都を出て、筑紫に赴かせ給ふ。宰府に着せられて、懷を述べ給ふ詩に、

離家三四月 落涙百千行

萬事皆如夢 時々仰彼蒼

こあり。宰府は人多けれど、はかゞしく物を宣ふべき人もなければ、常に一室の内にのみ日を送り給ふ。都府樓も御覽じやられたるまでにて登臨したまふこともなく、觀音寺近けれども遊覽もしたまはず。ある時、不出門といへる題にて律詩を作り給ふ。その對句に

都府樓纔看瓦色 觀音寺唯聽鐘聲

こいふは、唐の白樂天が、遺愛寺鐘歛枕聽、香爐峯雪撥簾看、こいふ詩にも増りぬべしと、昔の博士は申しけ

り。渤海國の使者、裴文藉も、菅公の作を見て、白樂天に似たりと云ひたりとぞ。

延喜三年、太宰府にて例ならず惱みわたらせ給ひ、終に二月二十五日、御年五十九にて薨ぜられ給ふ。太宰府に近き四堂の邊に葬り奉らむとしけるに、輜車たちまち途中に止まりて動かざれば、やがてそこを御墓所とせり。今の御神廟の地これなり。

(筑前續風土記)

人を善く視ると惡しく視ると

人生鬼神に非ざれば、他人の心事の微を知るに由なし。然るに、社會は正者・不正者の雜居にして、至極入り亂れたるのみならず、正直の君子にして評判の宜しからざる者あり、不正の小人にして巧に外面を装ふ者あり。況や、昨非今是、人心の變化窮りなきに於いてをや。其の形跡の外に現れて分明なるものは格別なれども、心機微妙の邊に至りては、之を識別せむとするも到底人力の及ぶべき限りに非ず。されば、今これに接するの法を如何すべきかと云ふに、先づ我が智惠のあらむ限りを盡して他の言行を觀察

し、勉めて正を近づけ、不正を遠ざくるの工夫を運らして、さて、こゝに半信・半疑區別に窮する場合に至れば、其の不正者と稱する者が、直接に我れに對して不正を仕向けたることなく、又他に明白なる不正の形跡を現さざるに於いては、こにかくに之を正者として視るべきのみ。

斯の如くして、時に或は豫想に齟齬することあるべし。雖も、本來鬼神の明なき人智を以て信偽を決することなれば、他を善く認めて過てるも、惡しく視て過てるも、過は則ち同様にして、其の成跡に至れば、個

人のため社會のために、利害の相違大なるものあり。小人を誤り認めて君子と爲すに、果して君子ならずして依然たる小人に止まるも、曾て損益する所なきのみならず、或は其の君子視せられたるがために、情を矯めて一時君子の事を行ふこともあらむには、其の之を行ふ間は儼然たる君子にして、社會に一個の君子を生じたるに異ならず。之に反して、君子を遇するに小人を以てすれば、其の人の心を痛ましむる上に、恰も君子をして君子の用を爲さしめず、社會の公のためには一人物を空うし、私の交際のためには、

人を善く視ると惡しく視ると

八

一人の益友を失ふものなり。其の利害辯を俟たずして明なるべし。

但し、以上の立言は、正者不正者の識別極めて決し難き場合に適用すべきものにして、唯我が輩は社會交際の全面に就き、概して、人を善く視ると惡しく視ると、孰れか是なるを思案し、俗諺に「火を見たらば火事と思へ。人を視たらば賊と思へ」と云ふが如き、局量の狭き者を警しむるのみ。君子を愛し小人を憎み、苟も賤丈夫の言行を容れざるの一段に至りては、我が輩とても亦他と異なることなし。(福翁百話)

巴理府

巴理府は周圍二十一英里の地を占めセイン河の上流百十一英里の地位にあり。北緯四十八度五十分十三秒、東經二度二十分九秒に王宮を設く。路易非立の代に、今の大統領チエール君の意見にて、周圍に土壁を築き、今に儼存す。先年、コンミューンの亂には、大に防禦の功を顯したり。平時は、此の壁門に關をおき府内へ輸入する商品は皆税を課す。入府の商品に税を課するは、只巴理あるのみ。

此の府は、紀元の初、パリシーと云へる都府なりしが、佛國の起りしより、久しく歐洲著名の大都と稱せられたり。昔時は府内の廣さ三千四百餘町にすぎざりしに、今は七千八百餘町に擴め、セイン河は巴字をなして府の中央を流る。北岸の地をヴイルといふ。宮殿・官署・寺院・學校等の建築宏壯なり。南岸の地は、中央をシチーとす、即ちパリシーの舊地にて、市街・商塵・櫛比基布せり。南方をユニヴァル・シチーとす。苑觀廣達を開き、綠樹をうゑ、清爽宏麗、人をして廣范の景象中に居住せしむ。東北は製造場多く、職工市

街を設けたり。

此の府の人口は、一千八百年には五十五萬口ありしに、二十年を経て七十二萬口に及び、七十年に至りては、百八十二萬五千二百七十四人に及べり。歐洲大陸の都會にて、世界中只倫敦を除く外は、これと盛を較ぶる都府なし。其の壯麗なるに至りては、實に世界中の華嚴樓閣の地なり。百年以前までは、此の府の街路狹隘にて、屋廬も大小相雜り、妍醜錯雜にてありしに、第一世拿破侖絶倫の大威力を以て、各國に捷ちて收めたる財寶を傾けて、此の府の觀美を輝さむ

こ、遂に矮屋小舎を毀ち、中には大厦をも取除けて、其の宮前より北郭まで、長さ約三英里の域を改修して、白石を以て雲に聳ゆる傑閣を連れ、凱旋門を心點として、四面に十二條の廣街を開き、其の中にも、正面を貫きて宮門に達する街は、其の濶さ百二十餘メートル、名づけてシャンセルゼーの大路と云ふ。直線にコングルト苑に達す。左右には樹を植うるこゝ各兩條づゝにて、人を樹間の清樾中に歩せしむ。夜は瓦斯燈を其の砌に輝かす、燦として連珠の如く、雲に際して點々たり。博物館、博覽會等此の苑中に建築せ

られ、傑閣路を挟みてセイン河岸に聳じ、華煥目を輝かす。

一帶の路は、小石を以て地を固築して、其の上に纖沙を撒す、皎々として洗ふが如し。樹間の歩道には、中に一條の石片を敷く、熟視すれば石にあらず、巴理新法の叩き土なり。是はテールの種類にて、土沙を煉り固めて石をなしたるものなれば、路を竟ふるまで合縫の處なし。其の他、此を環る四周の街路は、みな此の法を以て路を修む。車走りて聲なし。倫敦の街は、車輪の響耳に喧しくして馬蹄の音をきかず。

巴理の衢は、車輪響なくして馬蹄の音の來るあるのみ。
(米歐回覽實記)

月無き夜

月無き夜半はいと心の底澄みまさるものなりけり。
海のおもて暗うして、寄せくる波の音豊かなるに、磯
邊の松にも音せぬ風の袖にそよこ吹きかふには、晝
の暑も忘れぬべし。秋はなほ蟲の音も競ひ行くに、
千草の花の色も見えて、沖こぐ船にまがふ雁がねの
渡るもいづこなるらむと哀なるに、浦の蘆邊に聲あ

はせたるもをかし。まいて、あかつき比に月の出づ
れば、宵の入日の残れるたぐひにはあらず。海のお
もてこがねの波の満ちくるにぞ、詞にもものぶべしと
は思はず。昔、いぎたなくて、在明の月にうとかりし
頃もありけりと思へば、口をしきものから、また羨ま
しくも思へり。

それより思のうつり行きて、實に古はあしき波にも
舟うけて松魚釣りしこともあり、またはいと寒きこ
ろ海にいりて鮑採りし事もありしが、いまのわかう
どは、まだきに老いぬるさまするものぞ多き。その

頃の昔物語に聞けば、うらわのたゝかひのおそろしさに、つま子打連れて、みやまへいりし世もありきと聞きつるに、月無き空にも心の樂を極めぬるはいかにぞや。かゝることも、かのわかうどの老いたるさまするをもあはせていはまほしけれど、また例の老いぼれて繰言いふこやむつがちなむ。(花月草紙)

鴨越

大將軍九郎御曹司義經、一萬餘騎を二手に分ち、實平に七千餘騎を差副へて、一の谷の西なる戸口にさし

遣す。吾が身は三千餘騎にて、一の谷の後鴨越を落さむとて、丹波路より搦手へこそ向はれけれ。兵ども、是は聞ゆる惡所にてあるなり。同じう死ぬることも、敵に逢ひてこそ死にたけれ、惡所に落ちては死にたからず。あはれ、此の山の案内者やあると、口々に申しけり。茲に武藏の國の住人、平山の武者所進み出で、季重こそこの山の案内能く存知仕りて候へこそ申しければ、御曹司、和殿は東國そだちの者の、今日始めて見る西國の山の案内者大に誠しからずと宣へば、季重重ねて申しけるは、こは御説とも覺は候はぬ

者かな。吉野初瀬の花をば、見ねども歌人が知り、敵の籠りたる城の後の案内をば、剛の武者が知り候ふこそ申しける。是れ又、傍若無人にぞ聞えし。

又、武藏の國の住人、別府小太郎清重にて、生年十八歳に成りけるが、進み出で、申しけるは、父にて候ひし能重法師が教へ候ひしは、譬へば、山越の狩にせよ、又は敵にも襲はれよ、深山に迷ひたらむずる時は、老馬に手綱結びて打懸け、先に追ひ立て、行け、必ず道へ出でむずるぞ、こそ教へ候ひしか、と申しければ、御曹司、やさしうも申したる者か。雪は野原を埋む

とも、老いたる馬ぞ道は知る、といふ例あり、さて、白茸毛なる老馬に鏡鞍置き、白轡はげ手綱結びて打懸け、先に追ひ立て、未だ知らぬ深山へこそ入り給へ。頃は二月初の事なれば、峰の雪むら消えて、花かこ見ゆる所もあり、谷の鶯音づれて、霞に迷ふ所もあり。登れば白雪皓々として聳え、下れば青山峨々として峰高し。松の雪だに消えやらで、苔の細道幽かなり。嵐にたぐふ折々は、梅花こも亦疑はれ、東西に鞭を揚げ、駒を早めて行く程に、山路に日暮れぬれば、皆下り居て陣を取る。

茲に武藏坊辨慶、或る老翁一人具して参りたり。御曹司、あれは如何に」と宣へば、是は此の山の獵師にて候ふ」と申しけり。「さては、案内能く知りたるならむ。」いかでか存知仕らては候ふべき。御曹司、さぞあらむ。是れより平家の城郭一の谷へ落さむと思ふは如何に。「ゆめく叶ひ候ふまじ。凡そ三十丈の谷十五丈の岩さきなどをば、容易く人の通ふべき様も候はず。其の上、城の内には、落穴をも掘り、菱をも植ゑて参らせ候ふらむ。まして、御馬などは思ひも寄り候はず」と申しければ、御曹司、さて左様の處は鹿は

通ふか。鹿は通ひ候ふ。世間だに暖に成り候へば、草の深きに臥さむとて、播磨の鹿は丹波へ越に、世間だに寒くなり候へば、雪のあさみに食まむとて、丹波の鹿は播磨の印南野へ越に候ふ御曹司、さては、馬場ござんなれ。鹿の通はむする所を、馬の通はざるべき様もある。さらば、やがて汝案内せよ」と宣へば、此の身は年老いて如何にも叶ひ候ふまじ」と申す。「さて、汝に子は無きか。候ふとて、熊王といふ生年十八歳に成りける小冠者を奉る。御曹司、やがて髻取上げさせ給ひて、父をば鷲尾莊司武久と云ふ間、是れを

ば鷺尾三郎義久と名乗らせて、一の谷の先打たせ、案内者にこそ具せられけれ。平家亡び源氏の世に成りて後、御曹司鎌倉殿と中違ひて、奥州へ下り撃たれ給ひし時、鷺尾三郎義久と名乗りて、一所に死にける兵なり。

(平家物語)

禁酒

近き世にやありけむ、郡司の酒いたう好めるありけり。晝夜をいはず、盃を放たざりけり。まどくなる者の諫め言ひけるは、酒は二なき薬にて侍れど、そこ

のやうにひたすら飲みてはよき事あらじ。且つは、疾を得て命もまゝみぬべし。酔ひしれてはおほやけ、わたくしの務をも忘れ、人に向ひてもむらいなるふるまひ多かめり。殊に、疴弱のつかはれ人など、恣に飲み過しなむには、のちく財も盡き家をも失ひぬべし。かく申すもかしこけれど、親しきながらひなれば、憚からず申すなりといふ。郡司うなづきて、かしこくものたまへり。すまひいなむべき詞だに侍らず。今よりふつに止むべし。されども、本性に飽くまですきて侍れば、ながく禁ぜむは、なか／＼ち

かごこや破りなまし。今より三年がほど、誓ひて盃は手をだも觸れじ」といふ。「さらば申し、かひ有りてうれしかり」とて、立ちて出でぬ。妻子なる者、みな聞きて悦びけり。

さて、日暮れぬれば、例の酒友達入りきたりけるに、郡司いへるやう、まどくなる者の諫、かたぐわりなく覺に侍るまゝ、三年がほどは酒斷ち侍りつ」といふ。これを聞きて、「いかで年ごろ愛で給ひける物を、速に止め給ふべき。また、人もまほに承引き侍るべきにあられば、例に倣ひて、必ず強ひもし勧めもし侍るべ

し。されば、ちかごこゝて酒斷ち給ふも、なかゝせむなかるべし。されど、かのまどくの御諫も、たしがたきことなれば、三年のさだめを打ちばへ六年になして、よるゝのみきこしめさば、友どちのまじらひにもうちあひ、かの人の諫にも違はでよかるべし」といふ。郡司目口はだけ悦びて、げにいはれたり。三年の限りを六年にのばへて、よるのみたうべむ事こそわりあれば、まどくなる者も打ちあぐべき道理なし。只今より三年のさだめを六年にのばへて、よるのみ飲むべし。さらば、彼れも此れもこそわりに

かなへり。いま日暮れぬれば、酒飲まむ事、さだめを破るにあらず。さて、酒暖めさせ、まらうごにも強ひ、われも引續け飲みて、頭打叩きて、あなこゝろよや。これいかで三年がほど斷ちぬべしとあらましごにだに定めけむ。げに大なる誤なりけり。さるを六年に改め替へて、よるゝ飲まむことひとへに吾が君の賜物よといひて、また引續け飲みて、やゝ酔ひゑれ、顔赤らめ、眼細やかになし、手かきつゝ、まらうごにいひけるは、夜のみ飲みて六年を過ごさむも、心もこなくさうざうしかるべければ、今より改めて十二年

を限りて、晝夜飲みなましとぞいひける。さても、うるさきちかごにぞありける。

(玄みのすみか物語)

辛崎の松

七月二十一日、辛崎の松見むとて、未明に京を立ちて白河越をす。湖水の眺望いづれはあれど、白川の嶺より見るをよしとす。三井寺これに亞ぐ。世に近江八景の畫圖多しといへども、まのあたり見るとは遙に劣れり。八景相距ること互に遠し。白河山より見れば一瞬千里、然れども、比良は右にかくれて、堅

田矢走も晴れざれば見わきがたし。この好景畫くとも筆に及びがたく、述ぶとも詞に竭しがたし。近く見てますくうれしきものは、石山と辛崎の松となり。北より南にさす枝三十間ばかり、東より西にいたりて二十間餘、幹は二かへにあまり、木の丈高からずしてまん丸に茂生す。洛陽妙心寺の松、島原角屋の松及び住吉難波屋の松、いづれもよしといへども、辛崎の松に對しては同日の論にあらず。實に天下の獨松なり。傳に云へらく、から崎の松枯れたりし時、明智光秀栽ゑかふるこて、

わが外に たれか植ゑけむ ひこつ松

こゝろしてふけ 志がのうら風

その後、これも枯れたりしかば、長嘯子また栽ゑらる。是れも亦枯れて、今の松は近時某侯の栽ゑられたるなりといふ。松のめぐりには、笹をゆひ、岸には石崖をして、いと嚴重に見ゆ。近年、枝條ますく垂茂するをもて、石を築出すことゑばくなりとぞ。松の前面に辛崎明神立たせ玉ふ、小社なり。或人の云へらく、前の説非なり。この松已に四百年に及ぶか。その事山門の記録にありといふ。げにも木だちの

さま百年來のものにはあらず。傳記猶ほ尋ねべし。

(著作堂一夕話)

長柄山の春景

見せばやな 志賀のから崎 ふもこなる

ながらの山の はるのけしきを

(新古今集)

湖上の花

花さそふ 比良の山風 吹きにけり

こぎ行く舟の あこ見ゆるまで

(新古今集)

信用の必要

人間萬事間違の世の中にて、過誤・失念・杜撰・横着・無心・有心の間に齟齬して、之がために時を空うし財を失ふことの多きこそ是非なけれ。政府の公務にても、民間の事業にても、又或は一家の生計にても、單に事物の數理に従ひて、正味の要用を達するは誠に容易なることにて、差したる人數を要するに非ず、隨ひて

費用も少なくして、速に辨ずる筈なれども、實際は然らずして、萬般の施設、その面倒なること筆紙に盡し難し。過誤失念は、之を改めて事を再びせざるべく、杜撰横着は、傍より監督して、之を豫防せざるべからず。之がために餘儀なく人數を増せば、又其の人數を始末するがために、更に人數を増さざるべからず。大家に多勢の人を雇うて、ために數人の飯炊を置けば、飯炊も亦飯を食ふが故に、今度は飯炊の飯炊を雇ふの必要に迫るが如し。彼の政府又は諸會社等に、検査調査取締參座立會など云ふは、何れも右の要

用に生じたることにして、其の煩雜浪費推して知るべし。

されば、人民一個の事業に於いても、矢張り同様の始末にして、正味の事業その事よりも、實は萬般の取締向きに忙しき次第なれば、事業上に最大一の要は、信用すべき人物を得て、取締の手を省くの一事にあるのみ。番頭手代が商賣しながら、自ら取締の事をも兼帶すること、大工と普請奉行と二役を勤むるが如き有様なれば、假令給料を豊にしても、主人に利する所は却りて多く、結局双方の利益なるべし。

世間の事業家を見るに、親子兄弟睦しうして、互に隔意なく思ふまゝに働くものに限りて、大抵皆上首尾なるは、他なし、取締の面倒を免れて、無益の手数と費用とを省くが故なり。無縁の他人を雇うて、骨肉の親子兄弟の如くならしめむとするは、無理なる所望なれども、徳義人情の談は姑く擱き、利益の一方より見ても、人の信用こそ商賣上の利源なれば、人に雇はるゝ者は、自利のための要用なりと思ひて正直に働き、主人も亦その正直の代價として報酬を厚くすべし。

商工の事務所に役員の群を成して賑々しきは、其の身體の薄弱にして事に堪へざるが故に、頭數を以て辨ずるの事情もあらむなれども、又一方より見れば、事務所全體に信用の空氣薄くして、監督取締の必要に促さるゝものと云ふべし。

(福翁百話)

賢明なる判官

今はむかし、一人の男ありけり。其の身榮に家富みけれど、心ざまよからぬ者なりけるが、黄金をひそかに麻の財布に縫ひいれつゝ、人に知らせずひめ置き

けるを、ある日検め見むとて出しけるに、何地へゆきけむ見當らず、あわて惑ひて家の四隅を探りけれど、に見付けざりけり。やがて、ふと過ぎつる日、自ら路に落しけることを想出でければ、今はせむすべなくて、誰れにても、吾が財布を拾ひたらむには、その人に百圓の報酬をせむと廣告しけり。

暫くありて、一人のたゞしげなる男入り來て、去とやかに會釋し、そのもこの失はれつるは、若しはこれにやあらむ。誤り無くば收められよと言ふに、失へる男は、よろこばしげに財布を手にとりてうちながめ、

「是れなり是れなり」とていさめるは、誠に心のたゞしき時のさまなり。やゝありて財布より金貨を取出し、二度三度かぞふる間に、忽ちいつもの如く心を濁らせ、かれて誓ひし報酬をはづさむとたくみつゝ、さも愕ける面色にて、この中には、もこ八百圓縫ひこみ置きつるが、今かぞふれば正しく百圓足らず、さては捷くもわが心中を推測りて、御身先づ報酬を收められつるにや」と思ひがけざる挨拶に、拾へる人は且つは愕き且つは怒りて、「こは思ひもよらぬことを云ひ給ふ。何條さることのあるべき。拾ふ即ち持て

來たり、持て來しまゝにて拾ひつれといひければ、此方もうちかへして、否といひつゝ、互に一步も譲ること無く、終に判官の許にいたりて、事の黑白を定むることゝなりぬ。

兩造は、なほ判官の前にて各の主張をのべたて、更に和解せむ氣色あらざりしが、判官は初よりまづかに之を聽き居て、すでに兩造が心術の善惡をやさこりけむ、尙ほ陳述をたしかめし後、さて一段音聲を高めて曰ふやう、各申す條あひ照すに、その事件まつたく違へり。甲は八百圓失へりといひ、乙は七百圓拾へ

りといふ。されば、ともに同一事件にあらず。よりて拾へる者はさきに拾へる金貨を收めて、正に七百圓失へりといふ者の届出でも時節を待て。失へる者は八百圓拾へりといふ者の申出でも時節を待て。いゝ明白に裁決しければ、甲乙兩造又言ふことなくて退廷しけり。さて、その財布はつひに拾ひし人にとゞまりけり。

亞弗利加の孤立

亞弗利加大陸が、一般に久しく閉戸の姿にて蟄塞し、

近き頃まで外國の影響を蒙らざりしことは、頗る異しむべき事實なり。此の點より觀れば、南北亞米利加の歴史と亞弗利加の歴史との間には、著き徑庭ありと謂ふべし。亞弗利加は、太古開化の中樞の一たる埃及國を有せしのみならず、古今の重要なる大國の門戸に位すれども、世界の他邦には殆ど知られざりき。之に反して、亞米利加殊に南亞米利加は、僅に四百年以前に於いて東半球の人々に知られしにも拘らず、其の發見後五十年にして、該大陸の概況、殆く世に傳へらるゝことゝなれり。亞弗利加の北岸に

沿へる地方は、理應に南亞米利加の如くならざるべからず。何となれば、地勢より云ひても、又歴史より云ひても、該大陸の地方とは違ひて、航海貿易に利なるが爲に、歐羅巴及び西部亞細亞と共同の動作に出づべきもの多かればなり。果して、此の地方は、地中海對岸の諸國民と一時交通せしことあり。然れども、此の交通が北亞弗利加の沿岸一帯の地に限り、それより内地に進及せざりしは、サハラ大砂漠の之を遮りしに由れり。蓋し此の砂漠は、駱駝の輸入以前に在りては、南進の途に當れる一大障礙物たりしこ

と勿論なるべく、該獸の助を得ても、之を横斷して旅行するは、極めて難く又危き業にてあるなり。特り國土の性質のみならず、住民の性質も外界の影響を受けて、此の交通遮斷の結果を致したり。尙ほ又西曆第七世紀に當りて、サラセン人の北亞弗利加に主權を握りしことも、一大障礙にして、之が爲に、該地方の全般は、實際に於いて、歐洲人の進入を杜絶するに至れり。其の外、第十六世紀に慄悍なるコルセール種族が、北岸の諸要港を占領して、地中海の商賈に痛楚を與へしことも、亦同じ程の障礙なりき。

歐洲人が亞弗利加と交通の路を開かむとするには、是等の強敵を凌がざるを得ず。然れば、亞弗利加が、古代に在りて、南部亞細亞との關繫の親密なりしは、更に怪しむべき事に非ず。實に、久しき間、東部亞弗利加は亞刺比亞人と交誼を結び居たり。此の亞刺比亞人は、西南亞刺比亞なる今のアデンの地に根據して、印度洋に沿へる諸邦と盛大なる貿易を營みき。さて、かくの如く、亞弗利加が亞刺比亞と交通せし事は、東岸處々に遺存せる古代の建築物、及び西南亞弗利加の金礦地方なる一層古き家屋の、慥に土人の工

作ならざるに證して明瞭なり。後世に至り、第十七世紀より第十九世紀の中葉まで、同じ様なる政治上の關係は、ザンジバルとマスカットのサルタンとの間に存し、更に近代に降りては、印度の土人との交易次第に盛になり、英領なる熱帶亞弗利加地方の警察隊をも、多く彼の國より募集することゝなれり。然れども、前記の事實は、主として海岸の地方に存するのみにて、大陸の中央全部は、今世紀に至る迄、外國との交渉を開かざるこゝに依然たりき。かゝる孤立の主因は亞弗利加全洲の地形に在り。即ち、外邊の

單一なるは、自然に外人をして内地に入ることを難んぜしめ、加之、亞弗利加の諸川は、中央の高地を限れる連山を通過する際、瀑布の爲に裂かるゝが故に、探検者も海より舟楫に頼りて川流を溯ること能はざるなり。海岸の地方が人身の健康に適せざるも、亦他國人の進入に便ならず、其の上、亞弗利加の政治上の狀勢も、是れまで、外人との交通に不利なりき。大陸の内地には、コルデス及びビザロの如き、冒險家を誘ふ程の殷富なる邦土あるにも非ず、又、始めて南部亞細亞に着きたる歐洲人をして驚喜踊躍せしむる

が如き、貿易商を扶助保護する國家あるにも非ず。許多の蠻酋各、其の小部落に蟠踞し、互に相反目嫉惡するが故に、一種族に表する好情は、たまく以て他種族の敵意を購ふこととなり且つ、土民の一般に鬭爭殺伐を好む狀、亞米利加土人より甚しきものあり。是等皆、外人をして其の進入の途に苦ましむるものなり。

又、亞弗利加は他國との貿易事業を幫助するに充分なる生産物を、自在に供給すること能はず。全大陸の主要なる産物にては、太古より黄金・象牙・奴隸の三

つなりしが、此の中、黄金は從來土民によりて秩序正しく工作せられしこと無く、又、三者孰れも東部亞細亞の香料・絹絲・棉紗、或は亞米利加の貴金屬・林園産物に匹敵すべき程の價值容量ありしこと無し。尙ほ又、土民が開化の程度甚だ低くして、交換によりて外國の貨物を需めむとする好事心を創造するに足らざりしなり。

水晶宮

水晶宮は原名をクリスタル・パレースイふ。英京

倫敦の東南サイドナムに在る奇異の建物にて、全體總て玻璃にて覆ふが故に此の稱あり。倫敦の士女之を以て最も興趣多く且つ最も失費少き盤桓の場とす。此の建築の起原を尋ねるに、西暦千八百五十一年萬國博覽會の倫敦に開かれし時、サー・ジ・セフ・パックストンといふ人玻璃製の高堂をハイド・パークに建てしことありしに、人々其の奇想妙技を永遠に傳へむと欲し、新に一團體を起して、材料を購求し、再びサー・ジ・セフをして更に宏莊優麗なる一堂を作らしめしもの、即ち現今の水晶宮なり。其の土木の功

竣るや、國王の臨幸を仰ぎ、大に管絃歌舞の筵を張りて、全都の耳目を聳動せり。其の後數歳を経て、回祿の爲に北部の一端を失ひ、全體の規模聊か狹小となりしかども、近頃其の跡の空地を閑雅なる庭苑に改めしより、却りて遊人は眼を園中の湖水の激灩に着けながら、耳を宮内の奏樂の曉琅に傾くる便を得るに至れり。

全宮の建築材料は悉く玻璃にて、唯骨柱の鐵なること下字の板なることあるのみ。屋背四壁とも日光を遮るること無ければ、屋内も野外と明を同じくす。陰雨

の家、に在りて暗く、外に出づるに堪へざるが如きには、此の堂特りよく衆人を慰藉すと謂ふべし。宮の長さ二百六十八間、幅は出入ありて齊しからず。高さも亦一樣ならざれど、最も棟に遠き所は十八間半に及ぶ。左右の端には、四十間の高塔各一基あり。其の北方なるものは、昇降機にて頂上に到ることを得。此處より遙に眺むれば、近傍の六郡皆掌裡の物の如く、爽快筆舌に盡し難し。

全宮は本堂・中堂・南堂の三區より成り、兩個の廣大なる歩廊之を串通す。本堂には大理石製の水槽あり

て、中に藻・荇・芙蓉の類を養ふ。又、玻璃製及び青銅製の噴水器、極めて美麗なる花壇、艸花を盛りたる釣籠數多あり。幾十百の彫像之と相參りて立つ。日光玻璃の屋背を透して是等の品物を照すに、五彩粲然として相反映し、其の盛觀美景また宇宙間に見るべからず。中堂には廣大なる奏樂堂ありて、四千の來賓を容るゝに足る一室と四千五百六十八管を有する大オルガンを具ふ。此の堂の隣に歌舞室及び合奏室あり。歩廊の中には畫廊及び讀書室各一箇あり。

又、宮内に十數房ありて、各相異なる時代并に典型の美術品を收藏す。其の主要なるものは、埃及・希臘・羅馬・アルハムブラ・ビザンチウム・中世期・復古期・伊太利・ポムペーの諸室なり。此の外、近代の美術工藝品を貯ふる室數箇あり。

宮は岡丘の上に在りて、前に數層の廣庭を控へ、巨多の立像之を裝飾す。廣庭を降り盡せば、更に廣濶なる庭園に出づ。茲に世界最大の噴水器を置く。其の中、噴水の最も高きは四十二間に達す。別に水塔及び瀑布數箇を設く。是等のもの一齊に動作する

時は、其の結果稀有の奇觀を呈す。庭園の下部に一大池水を湛へて、遊船之に泛ぶ。池中の洲には模造の古生物を置く。口を開きたるもの、眼を瞋したるもの、躍起せるもの、匍匐せるもの、千態萬狀、一々活動の眞に逼り、人をして前世界の動物苑に觀る想あらしむ。

尙ほ、園内にクリケット及びフットボールを弄する平場各一箇所あり。其の他、百般の遊戯場一も缺くること無し。されば、來遊者既に林泉の美に飽く時は、各自の嗜好に任せて適度の運動を行ひ得べく、去

かも是れ極めて少額の失費を要するに過ぎず。又、宮の内外に、諸種の飲料を薦むる者、繪畫雜貨の類を鬻ぐ者あれば、いよく遊人をして缺乏を感じしむること尠し。此の宮に來遊する人の數は、もこより日によりて同じからざれども、往々一日六萬乃至八萬の多きに及ぶことあり。

四季の歌

春

春も半は　すぎの戸を

おしあけ方に　見わたせば
軒端の雲は　さくらにて
そぼふる雨こそ　香ににほへ

夏

くもまの月も　やどるなり
水鶏の聲も　あきるなり
橘かゝる　ゆふ風に
岩もる清水　すゞしくて

秋

秋吹く風の　芭蕉葉に

二聲三聲 おとづれて

西の窓より 月かげの

傾く見るこそ あはれなり

冬

冬ごもりせる 雪の夜に

闇の埋火 かきおこし

炭やく賤が なりはひを

思へばいこそ 身は冷ゆれ

(泊酒舎家集)

牧笛

何時の頃なりけむ、時の帝に仕へて御覺にめでたき
内藏司ありけり。この人元來いやしき牧童の身より
拔擢せられたりければにや、小人ども讒言を構へ
て曰はく、彼の者こそいみじき曲者なれ。おのが監
理する御庫より、ひそかに世に珍しき寶物あまた盜
みとりて、おのが家に持て行きながら、巧に上の御眼
を眩すぞ大膽不敵なるこそ、まことしやかに言ひふら
しけり。さりければ、此の事いつしか君聽にも達し
けむ、一日、帝は何げなきさまにて、内藏司の家に御幸

し給ひて、奥深く通り給ふに、鐵の戸もて嚴しく閉し
つる一室ありければ、こはいぶかし。中には何かあ
る。開きてみせよと宣へば、畏りて御錠に従ひけり。
帝室内に入り給ふに、案に違ひて、驚かせ給ふこと少
からず。室内には白壁の傍に長き机と圓き椅子と
ありて、卓子の上には牧童の持つなる横笛と竹杖と
草籠とのみにて、四邊には他に一物もなく、右方の窓
より遙に外面を見渡すに、廣き牧場の草青く、躍るは
犢か兒羊か、遙かに見ゆる遠山影、うすく畫ける春景
色、にもいはぬながめなるに、帝は恍惚として立ち給

ひぬ。

内藏司は帝の御氣色をうちまもり居けるが、やゝあ
りて奏しけるやう、此の對ひの野山こそ、おのれが幼
年の故郷にて候ふなれ。君に仕へ奉りてよりは、日
毎に一時間づゝ、この室内に入りて昔を懷ひ出で、何
時かは折りを得て身の暇を乞ひ奉り、牧場をながめ、
牧笛を聞きつゝ、心靜に残年を送らばやと思ひつゝ
け候ふ。今はよき機會ぞと存じ候へば、ひこへに許
させ給へと乞ひけり。かゝりければ、帝はいたく其
の心得を賞し給ひて、諛言せし者どもを退け、前にも

いやまして内藏司をかへりみ給ひけりこなむ。

牧童

うなぬ子が 心をのべに 吹く笛は

おもふ節なき すさびこぞきく

(足代弘訓家集)

倫敦の統計

倫敦は嘗に一英國の主府たるのみならず、歐洲大陸中の最大都市にして亦全世界中の最大都市なり。

こゝに所謂最大とは、善惡に拘らず、百般の事情他の都府中に其の比類を見ざることの謂なり。左の統計は之を示して餘りありと思はる。

先づ人口より始むるに、大倫敦即ち廣義にいふ倫敦の人口は、西曆千八百九十六年の計算に據れば、五百六十三万三千八百餘にて、其の中、四百二十一萬千七百餘は内倫敦即ち狹義にいふ倫敦の有する所たり。之を、佛京巴黎の人口に比すれば二倍、獨京伯林の人口に比すれば三倍にして、又米國屈指の大都紐育の人口を二倍してブルックリンのを加へたるもの、或は

費府の人口を四倍したるものに相當す。さて、其の年々増加の度も、市區擴張の度に伴ひて、本世紀の一年奇觀にして、之を略言すれば、一バーミンガムの人口及び其の四分一、或はダブリンの人口及び其の二分一、或は二エデンバラ若しくは二ブリストルの人口に匹敵す。此の割合を以て推せば、八十五年の後は全市の人口七百二十五萬に上るべく、二百八十五年の後には九百萬を越ゆるに至るべし。曾て計算せられし所に據れば、倫敦に在る羅馬教の信者の數は羅馬に在るものより多く、猶太人はパレ

スタイン全土に在るものより多く、蘇國人は蘇市アバーデーンに在るものより多く、威爾斯人は威市カルデフに在るものより多く、愛爾蘭人は愛市ベルファストに在るものより多く、希臘人は希都アゼンスに在るものより多く、獨逸人は獨市フランクフルトに在るものより多かりきといふ。

倫敦市の本部は甚だ小き區域にかゝり、面積僅に六百三十二エーカー（我が八百七十七町歩許り）に過ぎざるが、此處即ち大都の要樞にて、尺土寸地も人々に争はれ、近頃千エーカー（我が千二百十八坪許り）の價

英貨二百萬磅(我が二千萬圓許り)にも上りし處あるに至れり。此の小區域を日々出入する人數は凡そ八十萬、車の數は七萬に減せず。チャリング・クロスといふ處を中心として六七英里の半徑を有する圈内のみにても、鐵道の延長二百五十英里を超へ、複線を算入すれば、全部の鐵道は七百五十英里以上に互る。

倫敦税關の收入額は全國諸海關の收入を合計せしものに等し。而して、都内郡區の徵税年額總計は、千八百七十八年の末に至りて二十年前の同額に二倍

するに至り、千八百九十三年に於いては、此の額三千六百八十三萬九磅に達したり。千八百九十二年十二月に終る前十年間に、全都内に新築せられし家屋の數は十三萬八千五百十七なりしが、此の時新舊家屋の總數は八十萬以上なりき。又、總街衢の長さを通算すれば、殆ど三千英里に及ぶべし。其の間に千六百の寺院あれども、かの八十萬の家屋を充填する住民の十分一をだに容るゝに足らざるべし。市民の盤宴する割烹店八千軒、珈琲店千七百戸あり。其の毎年費消する所は、小麥二百萬クォーター(即ち五

十萬噸、牛八十萬頭、羊、犢、豚併せて四百萬頭、家禽、野鳥九百萬羽、魚類百四十萬噸に上る。市民が飲料の量額も、亦之に應じて頗る大にして、麥酒一億八千萬クォー
―ト（我が百十二萬五千斛許り）、葡萄酒三千百萬クォー
―ト（我が十九萬三千七百斛餘）、酒精類千八百萬クォー
―ト（我十一萬二千五百斛許り）なり。
全市を照す無數の瓦斯燈の費額は年々英貨三百五十萬磅にて、暖室、厨房等に用ゐらるゝ石炭の量額は千百萬噸なり。日々の給水は一億五千萬噸に下らず。

倫敦の鐵道、馬車、運送馬車、其の他の馬車に關する統計の、亦吾人を驚かすべきは、推して知るべし。郡部及び都部鐵道の乗客の數は年々一億千萬あり。閩都數百萬の住民と其の幾億の財産とを保護する爲に要せらるゝ警察吏の數は、割合に少きが如く見ゆ。千八百九十二年末現在の都部警察吏は僅に一萬五千九十九人に過ぎずして、同年の警察費は百二十六萬四千二十二磅なり。別に、市部の警察吏六百七十一人、同警察費年額十萬磅を要せり。警察署長の報告に據るに、千八百九十二年に於いて、倫敦に百三十

五人の成年及び十七人の兒童の踪跡分明ならざるありしが、是等は、失踪者の全數二萬五千四百二十七人の中にて、竟に發見し能はざりし者にかゝり、他は百方搜索の結果、皆其の所在を知りたりとぞ。同年街上にて災害に罹りし者五千六百六十四人、其の中百四十三人は殺害せられしもの、他は負傷せしものなり。倫敦の罪惡は、不幸にも亦其の大きき富に比例し、犯罪事件の數大抵全王國に於けるもの、三分一に及ぶ。

歡樂の場も其の數甚だ多く、去かも其の種類に富む。

其の中、劇場五十、奏樂堂等四百ありて、一夜の入場者三十萬人より少からず。

千八百五十六年に市土木會議の初めて設けられし後、該會が支出せし金額三千五百萬磅なるが、千八百八十二年の分は五百萬磅に上りぬ。此の外に、倫敦協會と稱する團體ありて、歲入八十萬磅を有し、亦同様の事業に巨額を支出し來たれり。千八百八十九年倫敦郡參事會之に代りて設置せられしが、此は二百三十五萬磅の歲入を有せり。此の金額の中、約五十萬磅は國庫より入り、他は諸税金より來るものと

す。

又、府學校會議の費す所年々殆ど三百萬磅なり。諸學校并に圖書館の夥しき増設は、最近十年間に於ける著明事項の一に算ふべし。

凡て是等の事業の結果として、罪惡及び疾病を隱避する家屋は今や掃蕩を蒙るか、然らざれば、他の善良健全なるものに建替へらるゝ最中なり。又、通行に不便に、狹窄歪曲せる街衢は次第に改善せられ、新道亦多く其の間に作らるゝに至り、古は砂礫の上を通ひ難みし行人も、今は石木又は土瀝青もて敷詰めら

れたる大道を闊歩することゝなれり。

富士川の水禽

右兵衛佐殿謀叛のよし、頻りに風聞ありしかば、福原には公卿僉議ありて、今日も勢のつかぬ先に、急ぎ討手を下さるべしとて、大將軍には小松權亮少將維盛、副將には薩摩守忠度、侍大將には上總守忠清を先として、都合その勢三萬餘騎、治承四年九月十八日に新都を立ちて、明くる十九日には舊都に着き、やがて同じき二十日の日、東國へこそ赴かれけれ。各九重

の都を立ちて、遠き東路へ赴けば、平かに歸り上らむ
こゝも、誠に危き有様どもにて、或は野原の露に宿を
借り、或は高嶺の苔に旅寐をし、山を踰え河を涉り、日
數を経れば、十月十六日には駿河國清見が關にぞ着
き給ふ。都をば三万餘騎にて出でたれども、路次の
兵附添ひて、七万餘騎ぞぞ聞ゆし。先陣は蒲原富士
川に進み、後陣は未だ手越宇津の谷に支へたり。
さる程に、同じき二十四日の卯の刻、富士川にて源平
矢合ぞぞ定めける。二十三日の夜に入りて、平家の
兵ども源氏の陣を見渡せば、伊豆・駿河の人民・百姓等

軍に恐れて、或は野に入り、山に隠れ、或は舟に取乗り
て海河に浮びたるが、營の火の見えけるを、あなおび
たし、源氏の陣の遠火の多さよ。實に野も・山も・海
も・河も・みな武者にて有りけり。いかゞせむとぞあ
されける。その夜の夜半ばかり、富士の沼に幾等も
有りける水鳥どもの、何にかは驚きたりけむ、一度に
ばつと立ちける羽音の、雷・大風などの様に聞えけれ
ば、平家の兵どもは、すは源氏の大勢の向ひたるは。
昨日齋藤別當が申しつるやうに、甲斐・信濃の源氏等
富士の裾野より搦手へや廻り候ふらむ。敵何十万

騎かあるらむ。取りこめられては叶ふまじ。爰をば落ちて、尾張川洲俣を防げやとて、取る物も取りあへず、我れ先にくゞぞ落ち行きける。餘りにあてさゞぎて、弓取る者は矢を知らず、矢を取る者は弓を知らず、我が馬には人乗り、人の馬には我れ乗り、繋ぎたる馬に乗りて馳せむとすれば、索に牽かれて株を廻ること限りなし。折りしも、その邊ちかき宿々より、遊君・遊女ども召しあつめて遊び酒盛したりけるが、頭蹴割られ、腰踏み折られて、おめき叫ぶ事おびたゞし。

同じき二十四日の卯の刻に、源氏二十万騎富士川に押寄せて、天も響き地もゆるぐばかりに、関をぞ三度作りける。平家の方には静りがへりて音もなし。人を入れて見せければ、みな落ちて候ふとて、或は敵の忘れたる鎧取りて参るもあり、或は平家の捨て置きたる大幕取りて歸るもありて、すべて平家の陣には蠅だにも翔り候はずと申す。兵衛佐殿急ぎ馬よりおり、甲を脱ぎ、手水うがひをして、王城の方を伏し拜み、是れ全く頼朝が私の高名にはあらず。偏に八幡大菩薩の御はからひなりと宣ひて、やがて打取る

所なれば、さて駿河國をば一條次郎忠頼、遠江の國をば安田三郎義定に預けらる。猶ほも續きて攻むべかりしを、後もさすが覺束なし、さて又鎌倉へぞ歸られける。

(平家物語)

朝政

昔、平城天皇の御時までは、此の國にも朝政し給ひけり。其の儀式、いまだほのぐの程に、主上出で、南面におはします。群臣百寮各座に攝す。四方の訴人さうなく内裏へ参り集ひて、高き机の上にうれへ

ぶみの筐といふ物を置かれたりければ、あやしの民百姓まで申文をもて参りて、此の筐に入る。史記、辨少納言など次第に取上げて、これを讀み申す。群臣各これを評定し、主上まのあたり勅定を下さる。訴もし左右にあれば、即ち召し問はる。かたくのもの當時無ければ、退きて問はるべきよしを仰せらる。申文多くして殊の外に日たけぬれば、やがてその座にて供御をまぬらす。諸卿御膳をおろして、各これを食べ。其のまつり事、もし去果てぬれば、其の後ぞ舞樂御遊などもありける。君の御心には、民の訴を

きこしめして、御ことよりあるより外の大事無かりけり。「微旦取衣領會者少」といふ本文、これより起れる事なり。あさまつりごとに出づる事は未だ暗きほどなれば、衣のくびを探り得ること難しといふなり。

嵯峨天皇より以來、この事すたれにけり。この君殊の外に放逸にして、まつり事を御心に入れ給はず。されども、其の儀式は猶ほ在りけり。五位の藏人二人を召して、御倚子の傍にすへて愁を聽かしめ、群議を聽かしめて、のちにきこしめして成敗せさせ給ひ

けり。これ今の職事の始なり。嵯峨の別業などへ常におはしましける故に、御暇なくして、自らあさまつりごとに會はせ給はざりけるなり。(續古事談)

文覺と西行との會見

文覺上人は西行を惡まれけり。其の故は、遁世の身とならば、一すぢに佛道修行の外他事あるべからざるに、數寄をたて、此處彼處に嘯きありく條にくき法師なり。いつくにも見あひたらば、頭を打割るべきよし、常のあらましにて有りけり。弟子ども西

行は天下の名人なり。もしさる事あらば、珍事たるべしと歎きけるに、或時、高尾法花會に、西行参りて花の陰など詠めありきけり。弟子ども、是れ構へて上人に知らせじと思ひて、法花會も果て、坊へ歸りたりけるに、庭に物申し候はむと云ふ人あり。上人「たぞ」と問はれたりければ、西行と申す者にて候ふ。法花會結縁のために参りて候ふ。今は日くれ候ふ。一夜此の庵室に候はむとて、参りて候ふといひければ、上人内にて手ぐすねを引いて、思ひつる事叶ひたる體にて、あかり障子を明けて出でられけり。出で

ゝ暫しまもりて、是れへ入らせ給へとて、入れて對面して、年ごろ承り及び候ひて、見参に入り度く候ひつるに、御尋ね悦び入り候ふよしなど、念比に物語して、非時など饗應して、次の朝又時などすゝめて歸らせけり。弟子達手に拳を握りつるに、無爲に歸りぬる事悦ばしく思ひて、上人は、さしも、西行に見あひたらば、頭打割らむなど、御あらましにて候ひしに、殊に心閑に御物語候ひつる事、日來の仰には違ひて候ふと申しければ、あら、いふがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれむずる物のつらやうか。文覺をこそ

打たむずるものなれ」と申されけり。(永蛙眼目)

分業

爰に農夫ありて、其の耕作したる小麥を收納するより、磨車に運びて之を磨し、其の粉を擔ひて都會に到り、又之を以て麵包を製し且つ荷ひて市頭に販ぐまで、皆之を自らせば、徒に勞力と時日とを費すべし。是れ他なし、農夫は獨り耕作の法を知り、農具を有するのみにして、磨車の用方、運送の方法、又麵包の製法等を知らず、且つ其の製造機械を有せざるを以てな

り。故に、農夫の勞働は専ら農業に用ゐるを以て最も宜しとす。

若し、此の農夫一日は農夫となり、一日は磨匠となり、一日は擔夫となり、一日は烘匠となり、又一日は行商となる時は、五日間にして得る所の者、僅に金五圓なるべし。然れども、若し其の勞働を農業に専らにせば、之に由りて得る所の者、二三倍の多きを加へむ。且つ、農業を専らにせば、たゞ一種の農具を備へて餘りあるべく、又日々に之を使用するが爲に、其の財本なる農具も死物たらず。若し、然らずして以上の五

業を一身に兼ねる時は、五種の器械を備へざるを得ず。且つ、一業をなす間には、他の四業に於ける器械は毎に死物たらざるを得ず。是の故に、人其の業を分てば、善く財本を用ゐ且つ善く勞働を爲し得べし。此の事一業の中に於いても亦然りとす。經濟學者の始祖、アダム・スミスの説きたる一例を引きて、之を左に示さむ。

蟹眼針製造の作工は、幾ど之を十八課に分ち、鐵線を引延ばすを以て一人の課業とし、其の線を直にするを以て他の一人の課業とし、第三の人は之を切り、第

四は之を尖らし、第五は上端に粒を附するが爲に其の端を研ぐ。其の粒を造る業も之を二課或は三課に分ち、粒を以て針の上端に加ふるは其の一課にして、針を磨し且つ之を紙に挿すも亦各一課なり。

予嘗て蟹眼針製造所を一覽せしことありしが、此の製造所は甚だ寒微にして、唯十名の工人を雇役せるを以て、或は一人にして二三課を兼ねたる者あるに、其の機械も亦十分に整備せざりき。然れども、工人勉強して其の職業をなす時は、一日に蟹眼針十二斤を造り得と云へり。其の針は中等の大きさにて、重量

一斤毎に其の員數四千箇餘なり。故に、一人の造る所、其の數は四万八千の十分一なりとせば、一人毎に一日に造りたる數四千八百箇なり。若し、十名の工人、専門に習ひ得たる長技なく、各自獨立して針を造らむには、一人にて一日に二千箇の針を造らむこそ實に難かるべく、或は一箇をも造り得ざるべし。分業すれば、勞働の効驗更に多き所以、其の理五つあり。

第一、凡そ工人は何業に係はらず、數個の事に當りて纔に兩三度之を爲すよりも、一事に當りて之を屢すれば、大に練熟すべし。譬へば、鐵工の鍛冶をなす者、半週間之をなし、又半週間他の職業を爲さむよりも、日々其の業にのみ従事すれば、大に練熟するを得む。

第二、一の作業を止めて、他の職業に遷るときは、空しく時間を費すべきに、業を分たば、其の空費を省くべし。譬へば、蟹眼針を造る時、鐵線を直にする者にして、又兼ねて其の線を切るときは、最初に使用したる器具を放ちて他の器具を取り、且つ居坐を轉ずるの煩あるべし。されば、其の間に費す所の寸刻も、一

年の中には積りて數日となるべし。

第三、若し、分業の法にして其の正を得むには、終日使用せざる如き閑具なかるべし。其の故は、前例に於けるが如く、一人にして二業を兼ねれば、鐵線を切る間は之を直にする器具の贅物となるべきに、二人其の工を分ちて各之を專にすれば、二具ともに常に活用することを得べければなり。

第四、業を分つに於いては、其の成し易きは之を幼童婦女に課し、其の成し難きは之を強壯の人に課し得べし。かゝれば男女の別なく、皆其の力に應じて

使役することを得べきなり。

第五、意を數個の事業に用ゐむよりは、之を一事に留めて、新奇の良法の發明し易きに如かず。

此の故に、總て職業は、其の細分に過ぎて、却りて傭工の手に空閑を生ずるまでは、勉めて之を分つを益ありとす。但し、傭工に在りては、分業の爲に不利なること二つあり。其の爲す所一事に止まれば、倦みて快適ならざる事其の一なり。獨り些末の細技のみに練熟するを以て、若し雇役を罷免せらるゝことあらむに、更に職を覓むる事の難きは其の二なり。

然れども、此の如き小なる不利は、大に雇主の職業を妨ぐるものにあらず。之を其の利益の大なるに比すれば、其の相距ること甚だ遠しとす。是れ分業すれば、勞働の効驗更に多しと云ふ所以なり。

(初學經濟論)

志の有無深淺

志あるものは事つひに成ること云ふ語あり。志なき者の、事の成りしためしなし。志だにあれば、精力も其の方にはおのづから強くなり、師友書籍もおのづ

から好む所には集まるものなり。志なき者は師に遇へども問はず、徒に市人に向ふが如く、師も亦奈何々々といはざる者をば、我がいかんともせむ方なしと見限るべし。されば、人を諫むる者は世に乏しからず、諫を受くる人のなきが如く、教ふる者の無きにはあらずして、たゞ志深く學ぶ事を好む者の得がたきなり。

人志だに深く篤ければ、あながちに明師良友をのみ師友とせず、常に交はる世の中の人、常に見聞する世の中の物事、皆我が師友なり。されば、舜は邇言を

察し、顔回は不能に問ふこいへり。たこへば、如何やうのはかなく聊なる書一卷を執りても、文學に志ありて見る人は文學の益を得、德行に志ありて見る人は德行の益を得、政事に志ありて見る人は政事の益を得、言語に志ありて見る人は言語の益を得べし。此の如く、志す所には其の益を得て、志さぬ所には其の益を得べからず。されば、鹿を逐ふ獵師山を見ずこいへり。又、こゝに身分も人のたちも心ゆきも物ずきも、各別なる人數人相伴うて、野山に遊ぶ事の有らむに、其の目をつけ心をつけ得る所樂しむ所皆違

ふべきが如く、此の文學の中の人の得る所の大小高下、淺深、皆たゞ其の志次第なるべし。

されば、學を好む心の深く厚うして、志す所の高く大なるほど有らまほしきはなし。其の志深き時は其の至る所も深く、大なる時は其の成す所も又大なるべし。されど、小く志して小く成るも、聊も志のなく一も成す事のなきよりは、猶ほまさりぬべきなり。

(離屋學訓)

師友の撰擇

藝の師は、なるべくたけその藝のすぐれたるを擇み、道の師は、いかにも學術德行すぐれてよきを擇むべき事なり。善きを擇む事をせずして、たゞその勢のあるにすがらむとし、或は心善きに狎れ、侮り易きを擇み、或は恭しく高ぶらぬを喜び、或は居宅の近きを取らんと、皆志の薄きによれる驕り怠りの僻心得なり。さて又、師を信じ尊む事を知る人は、何事も打ちまかせ推譲りてのみありて、自ら心を勵し勉めて師に均くならむとも思はず、まして勝らむとも思はぬ癖あり。是れ又なき下劣の心なり。何れの道藝

も、みづから勉めずしては成るべきやうなし。是れを海中に舟を漕行くに譬ふれば、身の志と精力とは帆に風をうけ櫓を推すが如し。師はたゞ磁石を見て方角を示し、艫にありて梶を使ふ人の如き者と知るべし。

友は道行くに伴とものあるが如し。心はげみ進みて、大に道はかの行くものなり。又互に師となる益あり。膚粗き石を二つすり合すれば、二つ共にすべよくなる、いはゆる切磋の益とはこれを云ふなり。

論語にも「可與共學未可與適道」とあり。世に藝の師

友は多けれども、道の師友は少く、人はた藝に師友を求むる事を知れるは多く、道に師友を求むる事を知れるは少し。其の上、藝は師友なければ成りがたき事を知りて、道も亦師友なければ迷ひ易きことを知らぬ人世に多し。輕き事を重んじて難き事を易く思ふは顛倒の至ならずや。其の故を尋ねるに別義なし。藝に志す者は多けれども、道に志す者は少きにより、又道に志薄きによりて、おのづから輕んじ思ふにより、又藝は形ありて小さければ見やすくこらへ易きによりて、わが無藝と人の有藝との境もわか

りやすく、道は形なくして大なる故に見がたく執へがたきに因りて、吾が無道と人の有道との別も知りがたきによれり。彼の不知を不知とせよと云ふ教の意も、たゞ自知の明は因りて、學を好む心を深く起すべしとの教なり。

道とは何物ぞとならば、業と事と道理とを兼ねて、身を修め家を治め、國・天下を治むる道にして、文・行・忠・信の四教の全體を云ふなり。さて、其のやどれる所はいづくぞとならば、和漢の書籍と文武の諸藝と、又今日目前の世の中と、別けては賢人・君子・博聞・明達の人

の身の上に宿れり。志あらむ人は、必ずさる人々を尊み親み従ひ交りて、常に其の道を講求すべき事なり。

(離屋學訓)

平源二氏の興亡

平源の世は合せて五十四年、興亡の跡大かた一樣にして、殊に平氏の滅亡は、藤氏失權の面かげにも似たり。平氏は、初め源氏と同じく、武人の長と爲りて北面に候じたりしに、保元・平治の戦功を経て、藤氏に代り政權を掌握せしかば、頓に上臆と爲りて、武人の性

質を變へ、刀を棄て笏を把り、甲冑を脱ぎ長裾を曳き、齒を染め、黛を畫き、歌詠に耽り、音樂を好みし程に、櫻花を挿して青海波を舞へば、人みな其の風流嫺雅に感じ、拍手喝采して、櫻梅少將と呼び倣したり。

されば、烏帽子の矯めやうも、一種六波羅の新様を出して、四季の御所には雪月花の宴を開き、一門の榮花には三十餘州の膏血を絞り、平氏にあらざれば人にあらずと誇りて、武人を輕んじ、武士を賤しめ、宮人は宮人どちと、樂器を戰場にも携へ、短冊を鎧袖にも挿みて、詩歌管絃の遊は陣中にてても廢めざりき。喊聲

天に震ひ、人馬狂奔して、一谷城看すく、陥るにも、城中悠然として音楽を奏しつゝ、敵をも既に泣かしめたれば、味方にも泣く者あるべし。平氏を仰ぐ武士漸く減りて、東北は悉く叛き、西南にも叛者出て來たれども上臈は干戈になれねば、維盛は戦はずして奔り、宗盛も沈まずして虜と爲りぬ。仁安よりこなた二十年の榮花、遂に重盛が一睡の夢を爲りて、源氏一統の世とは爲りにしが、源氏も亦平氏の如く、頼朝は武人にして起り、實朝は上臈にして滅びぬ。抑も、當時は、武人の世にして、武人を治むるやがて世

を治むるなれば、武人の心を獲るもの政權をも得ぬべきは當然の理にて、武人を治め政權を執るも、必ずしも平源二氏に限るにあらねば、頼朝は高位高官を貪らず、勉めて武人の心を攬りて、武人とともに進退せり。實朝に至りては、また藤氏の宮人にならひ、平氏の公卿をまなびつゝ、朝夕の遊には鞠を蹴、歌を詠み、かたへは佛説に惑はされて、世務をも省みざりし程に、いつしか政權退轉して、頼朝が平氏の後を相續せし以來三十五年を経て、遂にまた北條氏に譲りたりき。

(日本文明史略)

怯懦

受領の子のさしすぎほこりにふるまふありけり。人に欺かれて太刀一ふり買ひてけり。此の太刀、いかなるされよき鎧をも通しなんずと、人毎に見せて誇りけり。されど、未だ自ら試みざるは一ぢやうならずとて、月のほのくらき夜、ずさ二人具して河原をさして行きけり。かしこに臥せるかたぬのうまいせるを見て、太刀引抜き、拔足ゑて歩み寄り、もろ手に太刀ふりあげ、かたぬが腰をかけて、眞二つに斬りて

やをら逃げ走りて一町あまり來ぬ。

されど、そゝろに胸踊り足震るはれけるを能く念じて、ずさに言ひけるは、『胴斬りといふ者は、かひな能く固まらざる人は斬り得ること難し』と、かんの殿こそたまひしか。見よ、あのやつ今胴斬りにぞゑたる。さても、この焼刃の鋭さよ。あす友だちの人々に語らば、嫉きまで羨みあざみなんずといふ。ずさども、げゑうはあらぬ御太刀にてこそ候へ。さるにても、今一たび往き給ひて、それがさまをも御覽ぜ知らせ給へ』と申す。げによかなり』とて、再びかしこに至り

て近づき寄らむとする時、かたぬむくく、こ起きかへり、寐ほれたる聲して、何者ぞまた來て打叩かむこはする」と罵りけり。世にわれぼめする人は、大方かく未練なるものぞ多かりける。

(まみのすみか物語)

月は世々のかたみ

今年も、はや半過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて、萩吹く風も身にまむ頃なり。久しく翁がり行かねば、此のほどの老のねざめも覺束なし、いざ尋ね問はむとて、ある夕暮に例の人々打ちつれて來しが、又

も參らむとて歸らむとせしを、翁こゝめて、今宵は月もよし。薄酒すゝめ參らせむ。まひてこまり給へ」といへば、翁の心にはいかでそむくべき。さあらばとて、おのく坐をまめて、清談の露やうく繁き程に、家人やがて心得て、取りあへぬまでにあるじまうけし、さかな取りそへて、盃出したり。諸客皆酔うて興に入るこぞ見えし。かくて數献に及びて、玉山倒るゝばかりに見えける。

さて、翁いふやう、大かたは月をもめでし」とよみたれども、老の心も月見るにこそ慰み侍れ。されど、それ

につきて千載無窮の感も起りぬれば、うべ、月を『人の老なる』ともいふべかめり。但し、月を見るにいろくあり。今思ひ出でたる事あり。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、ひこり隅に向ひて居たりしに、さる武士の一丁字も知らぬが、月をつくぐと見て、『月はわたりいく尺かあるべき。おのく考へて見給へ』といふ。又同じやうの人、かたへより『あればもの、切口と見ゆ。奥へ長さいかほどかあらむ』とて、互に僉議しけるを、聞く人々皆舌を喰ひけり。翁もをさな心にをかしかりき。今思へば、世俗月を賞し

て、光のあかきを誇り、影のきよきにめで、良夜とて、たゞうちより物喰ひ酒飲みなどして、歌ひの、しるを樂とするは、かの寸尺を語るに均しかりぬべし。又、騷人・墨客の月をながめて字ごとに金玉を彫り、句ごとに錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、それまた景氣のうへを翫ぶばかりにて、月に深き感ある事を知らぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、我が儕、古人を慕ひて、其の書を読み其の心を知りつゝ、常に世を経たる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照し來て、今にあれば古人の形見ともいふべけれ。

月は世々のかたみ

百八

されば、月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影もうつるやうに覺え、月はものをいはねども語るやうにも覺え、忘れてはむかしの事を問はまほしくも思ふぞかしといふには、諸客耳をすまして聽き居たり。

(駿臺雜話)

新撰國文講本卷之五 終

明治卅二年二月廿二日印
明治卅二年二月廿五日發行

新撰國文講本五ノ奥付
定價金拾七錢



發兌元

編述者 和 田 萬 吉
編述者 永 井 一 孝
發行者 東京市神田區裏神保町九番地
代表者 合資會社 富 山 房
印刷者 合資會社 富 山 房
印刷所 東京市日本橋區藥研堀町三十三番地
同 所 仁 科 衛
厚 所 信 舍

合資會社 富 山 房
(電話本局一〇三六番)

(電話浪花一四六番)

206-149

220.8

